

第35回夏期福音特別集会（3）

霊生なるキリスト——ヨハネ伝第12章20～25節

1988年8月20日

小池辰雄

栄光を受くべき時 一粒の麦 十字架が土台の聖霊 永遠の生命 内側から変貌 死生の転換 もの凄いキリストの霊生 著作集第十巻の九月三十日「生魂の重さ」 詩「主さまあなたは永遠に人間らしきもの 霊然の世界」

【ヨハネ12・20～25】

20 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人^{びと}ありしが、²¹ガリラヤなるベツサイダのピリポ^{きた}に來り、請いて言う『君よ、われらイエスに謁えんことを願う』²²ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果^みを結ぶべし。²⁵己^{おの}が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。

● 栄光を受くべき時

ヨハネ伝の12章20節。中心はただ一点です。

²⁰ 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人^{びと}ありしが、

ユダヤ人にとっては、「ギリシヤ人」という言い方は「異邦人」という言い方と同じことです。

「ギリシヤ人は智慧を求め、ユダヤ人は徴を求める。ギリシヤ人には十字架は愚かで、ユダヤ人には蹟^{しるし}だ」

とパウロが言いました。そういうギリシヤ人。でも、一生懸命にやって来たわけだな。福音が異邦人に移っていく一つの例です。

²¹ ガリラヤなるベツサイダのピリポ^{きた}に來り、請いて言う『君よ、われらイエスに謁えんことを願う』²²ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。』

十字架の事をこうおっしゃった。

「人の子の栄光を受くべき時きたれり」



と。十字架がなぜ栄光なんですか。栄光という言葉は内容を二つ持っています。もちろん、その十字架と聖霊のことです。どつちも栄光なんです。神さまが、

「お前は羔こひつとなれ。イザヤ書53章をお前は身体で現せ」

と、これが栄光なんです。神の御意がそのように現れた。贖いの業、そんなことは誰にもできない。これが栄光なんです。

●一粒の麦

²⁴ 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在

らん、もし死なば、多くの果みを結ぶべし。

十字架の死のことを、一粒の麦に譬えられた。ここに掲げました、ヨハネ伝12章24節、

「誠に誠に我れ汝らに告ぐ、一粒の麦地に落ちて死なば多くの実を結ぶべし」

今度の集会の標語は、全部私は本当にスーッとまたたくまに書いてしまった。八月の始めの一週間、滑るように讃美歌は湧いて来るし、やはりこれがクライマックスだということを使った。こんな者を通してキリストの栄光が現れる。昨日から言ってます。私は誰に何と言われようと一向差支えありません。ああそうですかと、それだけでいい。

「汝知り給う」

と。キリストは、

「我れ汝を知る」

と仰ってください。

この句を読むと、私の兄貴をまた思う。私にとつては一粒の麦でした。欠けがえのない兄貴でした。彼が地に落ちて、私はキリストと呼ばれた。まだ満二十歳にならない時に内村鑑三の門を叩いた。第一の導きは兄の死である。生命をもって導いた。これは徒いたずらにできない。兄の聖書の扉に、

「救われる者の我が家族、我が親戚に我れ独りならざるを祈りて」

と書いてある。私一人のほか誰もこれに応じなかった。私だけが応ぜしめられた。皆さんも、いろいろご体験があると思います。何年経つても兄貴は兄貴。27歳で仆れても、私が百歳になつても兄貴は兄貴です。兄の写真を見ると、私はいつまでも9歳若い自分を自分とは思わない。不思議なもんだ。

●十字架が土台の聖霊

天上天下、東西古今、唯一人の「一」が、キリストがここに死ぬ。万人を救いにもたらさんがために。こちら側のどうこうでは絶対にない。絶対無条件の救い、これが十字架の救いです。

物理的にいえば、何もこの麦は死んだのではない。破れて根が生えて芽が出て穂が出る。



けれども、このキリストの言葉は、一粒の麦が破れる事を「死ぬ」とおっしゃった。すると、「多くの実を結ぶ」

という。私みたいな者を通して、幾人の人がとにかく救いの世界に導かれたか。親鸞が言ったように、私には弟子はありません。ただ私はキリストのお指図に従っているだけです。親鸞が言うとおり、

「弥陀の御もよおしによって」

ということ。あなた方は、私をきっかけに、福音の世界に來られた。私は嬉しくてしょうがない。十字架が土台であり、聖霊が本当にあなた方の中に生きていれば、召団は絶対に破れません。

「空中に司っているサタンは偽りと人殺しの霊」

と、キリストが言われた。ヨハネ伝9章に出ている。そんなものに絶対に負けはしません。「主さまー」

の一言でもってサタンは逃げて行く。

●永遠の生命

²⁵己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。

という凄い言葉だ。「己が生命を愛する者は」の「生命」はヘブライ語でいうと、「ネフェシユ」という字ですが、相対的なこの生命、これを失う。

「この世にてその生命を憎む」

という。万人は己が生命を愛している。別な言葉で言うところのエゴイストというわけだ。執我、我に執している。これがエゴイスト。万人はエゴイストです。万人は罪びとで、

「義人一人だになし」

とパウロが言ったのはそのことです。

「そのエゴをすつ飛ばしたぞ、根底からすつ飛ばしたぞ」

というのがキリストの十字架です。相対的な私たちは死に至るまでエゴイストだ。いいよ、そんなのは。そんなのは力が無くなってしまう。パウロのロマ書7章は、パウロが救われた後の嘆きです。

「生まれつきの私はこんな野郎だ。けれども、このようにして救われている」

と言って、ロマ書8章で凱歌を挙げている。絶対矛盾の自己同一ということだ。ドラマであると言っているのは、世界の歴史ばかりではない。我々の生涯そのものがドラマである。けれども、キリストは

「御霊は私たちを栄光より栄光に至りてついにキリストの相に化^{すがた}するなり」

と、はつきりと約束されている。約束されているが現在の事実として私たちは体感するこ



とができる。

「私は人生の最後の段階を、峠を乗り越えました」

と、はつきり言った。84歳にもなつて、そんなことを言ってるんだけど。問題はあつても無いということです。もう、楽でしようがない。楽しくてしようがない。福音でなく^{ちきいん}て楽音だ。力が来てしようがない。

「己が生命を憎む」

ということは、このキリストを身体で受けとると分かる。「こんなものはなんだ!」といって、己が生命を憎む。そうすると、「ゾーエー」という「永遠の生命」、キリストの生命が、霊生が入つて来る。

●内側から変貌

私は今度は、みんな私の号にその時の字を当てた。「^{てんせい}天生」という。「天」はキリストです。キリストに生くる者という意味です。使徒たちの信仰の現実はそのいうところだ。だから、

「我々は使徒的信仰に、使徒たちの信交の現実に戻ろう。預言者の精神に戻ろう。」

プロテストタントでもカトリックでも何でもない。原始に戻る、それが本当の前進である。帰り行く事が進み行く事である。躓いても転んでも滑つても、前進のみ」

と、私はよく言うでしょ。ざるを得ないんです。力んで前進するのではない。止むにやまれずして、語る。止むにやまれずして、人を助ける。

この我執ということ。「知・情・意」は、人によつていろいろですが、みな持っている。パウロなんかもこれをみんな持っている。特にパウロは意志が強かった。それから「情」の深い人、エレミヤなんかはこつちの方だ。ヨハネも情です。「知」は、エゼキエルみたいな人。パウロはこの知も強く持っていた。アウグスチヌスは知です。「意」は特にパウロでしょうね。ルッターもそう。知はカルビン、大神学を書いた。いろいろあるわけだ。内村鑑三なんかも意の方だ。藤井武は情の方だ。

その人の持っている一番長所、それが我執の種になる。その執我というものを、自分の一番豊かに持っているものにおいて、捨てていく。これは自分では捨てられない。

「お前の我執の中心のものは、私は十字架に架けたぞ。自分が一番優れているところのものを捨てろ」

と。捨てられない。あの金持ちの息子が、

「お前、それを全部捨てて、貧しき者にやれ」

と言ったら、すごすごと逃げて行つた。あの金持ちの我執は「富」だ。富における我執であつた。あるいは、「腕力」の我執もあるだろうし、「権力」の我執もあるだろうし、いろいろある。

「それはみんな私が引き受けた。お前は捨てられないね、私が捨ててやつたよ」



と。本当にこれを、

「有り難うございます」

と言って受けとれば、変わる。そうすると、内側から変貌してくる。私はいわゆる「潔め^{きよ}め」という言葉は嫌いだ。とにかく、変貌して来る。自分が清まるのではない。キリストの光のみ姿がそこに生命となって形成が始まる。霊生が、光の霊生が、本当の力の霊生が、本当の智慧の霊生が、始まる。そういう賜りたる変貌なんです。「自分で変貌しました」なんて言っているのではない。この集会を迎えるのに「私は最後の峠を乗り切った」と、最初に言っただけでしょ。本当だから。それで最後の集会を迎えることができた。聖名を讃えるだけです。

●死生の転換

「人もしキリストに在らば新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ新しくなりたり」(コリント後5・17)

という。

「人新たに生まれずば天国に入られない」と。全部、死生の転換だ。

「我キリストと偕に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず。キリストわが内に在りて生くるなり」(ガラテヤ2・20)

と。観念で承知している世界ではない。観念でいくら承知し、いくら信じてみたところで、これは観念信仰で、何年経つてもダメだ。聖言を本当にくらわなければ。

「我は永遠の生命のパンである。私を食らえ。わが肉を食らえ、わが血を飲め」

と。そういうような突破を、やっと八四歳にもなつてやっている、こんな情けない者です。けれども、私は、今までひとつも偽りとは思いません。偽り、ごまかしはおそらく最大の罪かもしれない。神さまの前に、キリストの前に、正直にあるということ。だから、私を捨てないで、キリストは今まで使つてくださった。また、倒れるまでやります。

「アナンケー」とパウロが言いましたが、「止むを得ざるなり」という世界です。

「福音を福音せざれば災いなるかな。これ止むを得ざるなり」

とパウロが言った。止むにやまれずして為すことが一番本当のことです。「ねばならない」ではない。

『言志録』の中の、西郷南州の好きな言葉、

「雨は止むを得ずして降る。

風は止むを得ずして吹く。

雷霆は止むを得ずして鳴る。

これを至誠という」



と。「ごうしyouか、ああしyouか」という選択ではない。

「ノア・ザン・キャン・アイ・ドウ」

「他にはしyouがない」

という動き方。これはキリストに捕まると、そういうことになる。人間はいろいろそれぞれ型がありますから、「どうでなければならぬ、どういう事をしなければ福音的でない」なんて、そんなことを言っているのではありません。一人一人はみんな、それぞれの路を歩けばいい。「足偏に各」^{おのおの}と書いて路^{みち}という。誰も他人の路を歩くことはできない。その路が天道に即しているかだけが問題です。それを本当の道路と言う。

●もの凄いキリストの霊生

「汝^{あかし}らは聖書に永遠の生命ありと書いて之^しを査^{しら}ぶ、されどこの聖書は我につき証^{あかし}するものなり」（ヨハネ5・39）

旧約聖書は全部、預言者の言葉は全部、キリストに焦点を結んでいる言葉です。キリストを彼らは知らない。でも、キリストに焦点を結ぶように、神さまに歴史的な順序で言われている。アモス、ホセア、ミカ、イザヤ、エレミヤ、第二イザヤ、第三イザヤというような具合で。

キリストが、その霊生をもって死人を甦らした事は、ここで一々申しませんが、ラザロのことなんかは一番激しい句です。

「出でよー」

と。ラザロは死んでもう四日目になって少し腐りかかっていたと書いてある。それが、「眠っているんだ」と。これはもの凄いキリストの霊生です。もちろん愛のこもった霊生です。イエスという方は大変な霊止^{ひと}です。とにかく、我々の思いにはるかに絶したところの絶対次元の世界を、キリストはこの相対界に展開しつつあり給うので、キリストを信ずるということはなんと驚くべき内容であるか。自分を全く投げ込み、自分を全くそこに倒し、自分を全く信じない。「こんな野郎！」といって自分を嫌う。そういう世界です。

悟りの世界ではない。仏教もいろんな真理があります。けれども、この福音のキリストの生命の真理の世界、愛の真理の世界は、はつきりけたが違う。

パウロや、ペテロのように、

「我を視よー」

の世界であるし、鎖が切れてしまうような世界である。使徒行伝は本当に凄い。今もなおそうであるという。「あの時はそうだった」なんてのではない。

復活のキリストがお魚を食べた。私は神学者の五、六人の群れにいたら、そんな事は宗教物語だと言って、皆が笑った。私は直ぐそのグループから出てしまった。かなり名の聞こえた連中ばかりです。



私は隅の小石だ。隅の首石おやはキリスト。けれども、絶対に負けないというものが来ているから、何と言われようと、どう扱われようと、「結構でございます、ああそうですか」と。本当です、これは。私はもう、ありがたくてしょうがない。

本当にこないだから、未だかつてない、ひとつのところに入ってしまった。清められたなんて言っているのではない。変貌の世界に、キリストの変貌の業の中に入れられて来た。眠くはなつても、疲れを知らないようなことになって来た。まあ、84歳にもなつて、「これから12年間かかって詩を書きます」なんてのは、ドンキホーテだよ。「何を法螺吹いているか」と。ああ、そうです、ホラかも知れませんが、澎湃ほうはいとして、私の中にたぎるものを如何せんというわけだ。ダンテもゲーテも書かなかったものを書きますから。書かせられる。それに生命賭けで立ち向かうので、誠に申しわけありませんが、来年から夏の集会は失礼させて頂きますと、こういうことになってしまった。あなた方一人一人を通して凄じ事が起きるよ。各召団がそれぞれの特色をもつて。私はそれを確信しています。

「十字架と聖霊の主キリストの聖名に栄光と讃美あれ！」

です。

●著作集第十巻の9月30日「生魂の重さ」

これはマタイ伝16章、第十巻の9月30日「生魂の重さ」の所です。

「人もし我れに従い来たらんと欲おもわば、己れ自身を棄て、おのが十字架を負いて我れに従え。己が生魂いのちを救わんと欲う者は是れを失い、わがために己が生魂を失う者は是れを見出さん。人もし全世界を得るとも、己が生魂を失わ

ば何の益あらん。また、その生魂の代に何を与えん」(マタイ16・24、26)

これはイエス自身の大告白である。彼は本当に己を十字架上に棄て給うた。神のため己が生魂いのちを棄て血を流し給うた。彼は復活して永遠の霊生いのちを身証なさつた。今も霊界で生きて我々にはたらきかけ給う。彼は己を十字架上に棄てて、世の罪を贖い、全世界を得ておられる。霊界に君臨し給うキリストに誰が反抗できるか。反抗する者は自ら滅びるまでである。

このキリストの十字架道を聖言に従つて歩く者はキリストから見えざる十字章を額上にまた心臓の中に賜わる。この世のいかなる勳章もこれに如くしものはない。その人は聖霊の力で十字架道を歩むことができる。世界史の中にそういう殉道の勝利者が人の知ると知らざるとに拘らず星の如くにいた。それは天界の神の書に記されてある。星の光よりもすばらしい光を放っている存在である。勿論キリスト者に限らない。神のみが、キリストのみが同類の人々を知り給う。

人一人の生魂(プシケ)は全世界にも代えられない。天秤の左の皿に地球を載せ、右の皿に一人の人を載せて重さを量るに、地球の方が軽くあがつて、一人の人の方が重く下



がる。キリストの天的論理、物理はそういう霊理である。キリストの中に全身で祈り入りつつ進まん、わが路を。

そういったような文章です、この十巻というのは全部告白です。単なる説明ではない。ヨハネ第一書の3章16節。これはヨハネ伝の3章16節と相呼応するから忘れられない。

「主はわれらの為に生命を捨て給えり、之によりて愛を知りたり。我らも亦兄弟のために生命を棄つべきなり。」(ヨハネ一3・16)

使徒たちはみな殉道の死を遂げて行つた。

●詩「主さまあなたは」

新しい讃歌「主さまあなたは」は私の告白です。また、あなた方ご自身の、お一人一人の歌であると思います。

A49 「主さまあなたは」(1988年8月3日作 歌調 讃美歌48「しずけき夕の」)

- 1 十字架・聖霊みたまの
我れを救ひて
戦はせ給ふ
- 2 主さま あなたは
我れをつらぬき
わが御光よ!
- 3 主さま あなたは
あなたを喰くちひ
わが肉の霊肉にく
永遠とわにぞ生なきん
- 4 主さま あなたは
わが脊椎せきついに
わが骨の霊骨ほね
聖手みて按おきたまへ
- 5 主さま あなたは
天あめの生命いのちを
わが血の血なり
ひとにわかたん
- 6 主さま あなたは
この愛をもて
愛の愛なり
- 7 主さま あなたは
生涯いのちの限り
ひとを助たすけん
歌の詩歌うたなり
- 8 主さま あなたは
あなたと一ひとつ如
聖名みなを讃ほめへん!
わが身のすべて
ハレルヤ アーメン

天生記之

●永遠に人間らしきもの

ゲーテの『ファウスト』の最後の言葉、

“Das Ewig=Weibliche zieht uns hinan.”

「永遠に女性的なるもの我らを引き揚ぐ」



というゲーテらしい言葉ですが、

「永遠に女性的なるもの」

これは、キリストを頂くと、あなた方ご婦人たちはこの永遠に女性的なるものの質を受けになる。これに対して、私は

“Das Ewig=Männliche”

「永遠に男らしきもの」

と言いたい。これは勿論、イエス・キリストに來るとそうなる。

「汝ら雄々しかれ」

という聖言はそのようなことです。男女同権なんていうのは社会的なひとつの民主主義的な角度の言葉で、女は女らしく、男は男らしく、その本当のらしさというものは、本質というものは、キリストに來ると本当にそうなってくる。

そして、もうひとつ私が言いたいのは、

“Das Ewig=Menschliche”

「永遠に人間らしきもの」

ということ。男であろうと女であろうと、その本当の意味では永遠に人間らしい、人らしくということ。人らしき、これはキリストの愛をいただくとうなる。この

「ダス エーヴィツヒ メンシュリッヘ」

ということは誰も言わない。キリストが

「汝ら父の全き^{まった}がごとく全かれ」

とおっしゃった、その全さというものが、男であろうと女であろうと、この永遠に人らしきものになる。そうすると、本当に兄弟姉妹ということが、天的な兄弟姉妹ということが本当の現実になる。天国的な現実です。永遠ですから、滅びない。キリストという方は驚くべき内容の方だから。

● 霊然の世界

だから、

「その智慧のいかに測り難いか」

と、パウロが絶叫している。そうすると、本当に私たちは、

「神の中に生きまた動きまた在るなり」

ということになる。それは、いわゆる人間的な意味で全きと言っているのではない。躓いても転んでも滑っても倒れても、「神の中に生きまた動きまた在るなり」という驚くべき世界です。私は、人間的に整ったような思想は嫌いだ。この生まれつきの我々は、カオス、混沌たるものだ。混然たるもの。ところが、キリストを頂くと、こっちの渾然になる。こっちの渾然の中心は霊然です。霊然たる世界です。



「我れキリストの中に、キリストわがうちに」

とパウロが散々言ったのは、この霊然の世界です。コリント後書11章のあの驚くべき艱難を突破したのは、この霊然たるパウロなんです。「パウロさんはそうですが、我々は…」ではない。皆さん一人一人がその霊然の世界に入る。本当にキリストの中に入って、やってください。

こういう最後の驚くべき希望が、終末的な希望が約束されている。黙示録は空望の世界ではない。黙示録は、ヨハネに示された時はあれだが、さあ、最後の新天地は誰か知らんや、その現実を。私も書き得ない。けれども、示されたように、聖言を土台にして書きます。みんな暗号です。聖書も暗号なんです。楽しい。何とも表現できない。パウロさんは所々で絶叫しているではないですか。

アウグスティヌスだのフランシスだのザビエルだのと、昨日から言っていますけれども、アウグスティヌスは面白い。430年の8月28日に彼は仆れた。ゲーテが生まれた日と同じだ。

「彼は何らの遺言もしなかった。何故ならば、神のこの貧しき人は残すべき何物も持っていないからである」

と、ボツテシウスという人がアウグスティヌスのことを書いて、そういう言葉をもって終わっている。そして、アウグスティヌスは死の寢床にいた時に、壁に文字を掲げた。詩篇の32篇1節です。あのアウグスティヌスは本当に、

「私はキリストに許されました」

と。魂がやはり素晴らしい。最後にはそうやって感謝している。

「**その愆^{とが}をゆれされその罪をおおわれしものは福^{さいわい}なり**」（詩篇32・1）

という、あの言葉です。

それでは、祈りましょう。祈るなんていったって、私がこうやって語って、あなた方が聴いて、それが全部祈りです。改まって祈ることはないんだ。けれども、祈りましょう。

